繁野話　五巻　上

へ13
3139
5上

古今奇談繁野話第五巻之上

八 江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈る話

往昔江口は色里となる。岸に沿ひながれに臨みて家づくりし。後の世は所せくふへあ
らそひて三瓦二瓦に至る。画舫蒲柳に結び縁をそこそこめぐらしたる墻の内より
桃笑ひ柳媚て、春宵に香を翫び、長夏に涼を納れ、いざなひいさなふ風客
多人は宜なり。霜凝る秋も臑を凍し、月にも星にもさぐり雨に雪にも分
あつさりとあそびて遊ひ来るへし。かの人の愚痴を病になりて水干に袴きて章臺
に馬をつなぐやからは、下司めきたる人の所ひろく多人なりや。やんごとなき方の
の顔をみて君さんとおもひそよりてきせるもあんべい縁さへゆるされ人の
のがれ来て家をいとめたるにあひて得てしば街にひきとられ、さびしきつれよ
そひきて来るも味まうくうれし風月のみ役せられて其趣をもしらざるの
隠れある事もほしげにてひとつの詮にきる人、都の往の河社を招きそめて縁

市谷田町
若狭屋
藤兵衛

江 戸

昭和九年九月十二日 購求

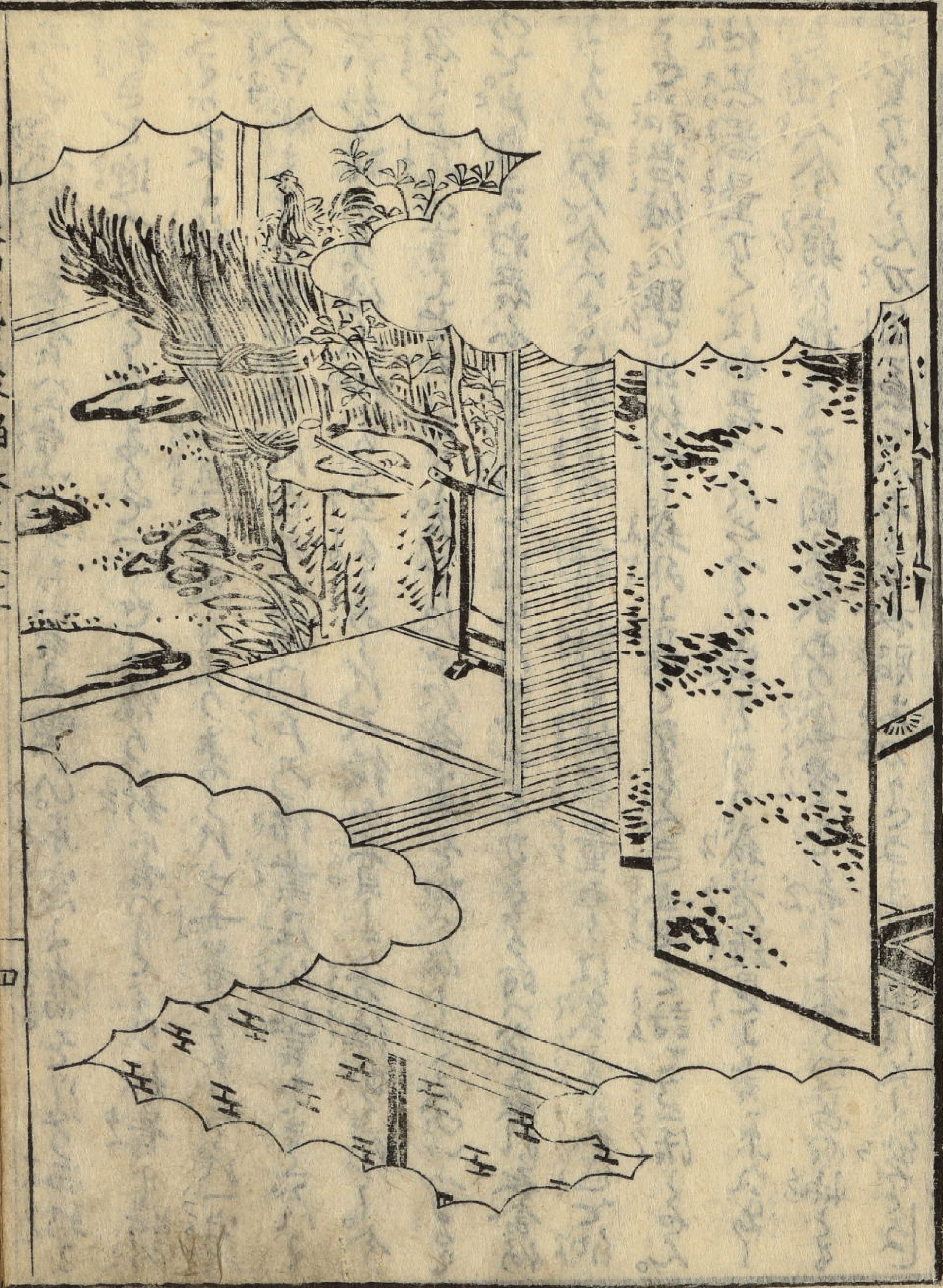
門 へ 13 號 3139 巻 5

あるは纜を繋ぐ舟人の情にみをつくしの名を妓婢のうへさへ数かぎりなく詠て
ゆゑさかり斯綺樓中に遊君の家多かれど此にて泊舟に寄すくだるめへよるあり
ぬあるやなる人の後へ云ひのこすべくもあらねども和泉の宿世の寃なりしぬ
いなし蓮生のむかし東門圍都の女雲のごとく叢のごとく管仲が女閭七百と
聞きしより後ぞ蓮女房との末の世まで是を免されて親しみしかくの
なる身を棄て数深に即ち遊人旅客を慰むるの設けとなりて世に女
の数多かりせば人の争ひおこらん。非禮の地を設けて非礼を安んずるの
計なれども行ひの流へかへらずして遊女の身はりの人にあらぬ地に数ある
遊女の家。文殊普賢白妙などを世に知られて此里のかぞへとするも
善名なれば数世をへて其名をば絶ざらしむる習ひなり。其は一條
金の時代。西国に尚国司の知行ありて。国司代などいふ人を置て
それより郡司をも知らせる国人に桐原の太夫正方といふものあり。

それが子に小太郎安方とて生れながらに心ざま優に都にはいざやかなりかば
ざ世に知らざる日に王城の尊きを慕ひて国司の館へも参り到きそのゆゑ
く上国の風流を戀しく思ひて日頃の念々より多くに見るなく私そこめ
て發せり。京に旅宿して折ふしは館に伺候し詣べき所詣あるとき
なにかとなればなく。水清く人柔かに家流やさく。田舎より京
にへるみの国を忘れてかかるいかなれば。旅宿の友とちる人ようつる播磨の
住人室津の遊君承て繼娶と云人あまにかくり興じて花街の不定を定めかれ。
にいの遊君どもの才色優長なるを定め其の趣に戯語を候しけに
に執き。眼よるの色甲斐を甚へ眼標として更にみせぬ君を足る
なみへと標と笑ふも口惜かれ。名ある君と青楼の酒を酌みて古の
を訪はせんと。室木の刀自が許に日なか逗留て。其首に白妙といへる君
十七歳より遊客をとて。色も九年に煙花に馴れてよく人情の向ふ所を知り。

老媼の顔厚く足がら身を擲ち躍きゆる若人あ侍さなりとぞ此
君をみんとて日を重ねて来る里の者も好が座には下戸も多く飲し好
をみれば粉面皆黒しとぞてたりしけるが小石部白妙を独でみれば朧
げに一露の鮮なるがごとく眼は秋水の潤ひがごとく芙蓉の眉を顰ます盃物
粧によれるをぞさまてあるが故に聴色の墻の花の中にて盛なるもなしとうたる処
なるやすく釣は名ある君のぞへてみんとおもひし世に稀なるは温柔乃
性は妓女のならひ擬の撒漫のすれば移見をなせしむ。白妙は情意和整う
ちて客も久しく別れて朝乃来しんと欲する白妙煙花を出んと
するのむねぞありぬあるが客のおきし旅は知を源く金を右ひて。終身相
従んとおもふべきみればも小石部は只又なるゝ人の如くと思はんく白妙がくべ
に同意せず。底解居ぬれ宝の菜も整らばなくらてげらさん〳〵猶と
睦月の初旬と見巧。終日来るをなげ般と睦して来るは県の忘とは海よりくへて玄

恩の底をあらば情義を山よ壁よりまさべき尚高し。只主人が中より風流
を卓はして。其餘巨室大賈白妙をみんとすれども小石部嫁紆
を用ひて大差大使が自然と執ぞるてたへまなく。此客人一て我家乃
揺銭樹なりと喜をれど。必や娼人は篋中に聚寶盈なく。空嚢中に
日に空乏して刀自の笑顔漸く小変ど。困るる小石部が父親男児が鍾
よありて形跡てしはずと暇て書とよせて喚回せども。月の半月の末く
延捱て帰らなかし。後は父のいかりうるさてぞしと家督よ。然旨まて務
世ぐれ。着より利をみれて宝なは利を深く利足て変ど男女の志情
は騰乃冷なるよつけて人の裡つよく熱くるおぞひ。主自白妙に知恵
をけて他を逐ひ遠ざけんとすれども。只耳にらてあれべ。今は近
小石部に對し種を無異とせひ。他がいかりて出去らん實体僅せども性
温柔の人はよく詞やかつて激さる心なりけまさべ。只ひさす白めその



ありて。我輩の衣食ハ竇ハ穿ち宮み賣ひ。東窓に鶏を送り西邻に
新きを迎へ。彼人これに来りて一とせに餘り。新宮へ行より知音も踈く
てまが家に鍾馗あれど一匹の小鬼もより来らず。少女等へ来足らず一家
人口氷もきて飽小足らず。白妙で畊門戸乃作業庄公に言をきるだて
られ多ク所なり。彼人神より空にあらず。大錢を費して方後かく身どし。今
忽ちに無情の言ぞと出しかて。たなたぶれ我輩をかづ偽しく人のするも
のど戸自云。わ君心よりく彼を追出んてぞてをなさずる時ハ我家の衣食ゆ
えなりそゆん。今へさじ貪客に説じ討て。他器量あらば家貴家匠と約
させ。和君彼に跟て出行べし。我外に長となるべき女児を討て生活らん。
他其器量なくば和君へれ労ても空となり。我老後見に立ず系る出て
そ。彼人今窮り雖も本国に家あり。家貴を負し来るハ其附標る
甲斐なからん。刀自気て小さらぐ衣服あ力るまで賣はくし給くは

てきこゆれおるく。本国へ不毛なる俗従者どもは生活にまへ。彼が望き及
へぬぞ多て係るなかるゝて君が身の價桐角の数あらば我よ二念なく
とらわ好意をそむけて。彼が手ふおなるをきり使もまたれて說ごさ
し。庄公直に說て端的をきりまへり。我足と說にゆのたわらひあん
と。後魁二人が向ひ居る席ふそひ事を說ゞれより小さる赤面
して答る所なかるべし。白妙も傍ふそるむ手痛てありしが。へ庄公た
ざ其數を說まへとて。刀自ふに算計て云。長の齢時ゐされども
尚白業の通あり。別人ならば緣武百足をおむべし。此度今急しき
時ぞなれば百足をおむ。それも三日を限てたずに價を取らせれ
へをはさん。三日ゐかたば我家に来りまへるぶはらず。蕿絃よりて出
出さん。白妙取言して云。かる泥子の遊るそは争なし来らん。十日は
を延て待をるしまへ。刀自さ々ふ窮人百日を限るともなん

をうくべき日と延して我をちるどんば尚恥る所なく。鉄皮に面をはらし
とももよく我家に来らんや。日数経ば女も新人有りてかはりくるる
感じと泥をゆるくしてたもらば十日とかぎり免じおどんばかく
我家に入て成ゆるさず。白妙小きぬが方をもえおりそば。彼其價を免
じ来ること恐らくハ庄公遠變あらん。刀自百匹なりづてかれゆる
して。老が身六十に近く日ハ衛佛に長斎をいかんぞ信を背んぞや
むれたのもなけまで。妙變の恥をとそて請備ハ免ぜぬ事あらじ。若銀と
からまで絡に變あらば。成作らハよく我を笑んと詰てまらくハ我をなざ
しれ銭を免じ来るとも。空でとなさん。刀自さあらば執照を免せんと。老
氣を張て十日限りの契約をうたしある。やがて奴足をおそむく去りぬれ
どいかんぞ極て免ざべき。ぶ気に縁て白妙さ又日もなば事の由も必
ぞ堂せる人我に服思きてはなれおそとがてはの耳よのこりて京ゑ

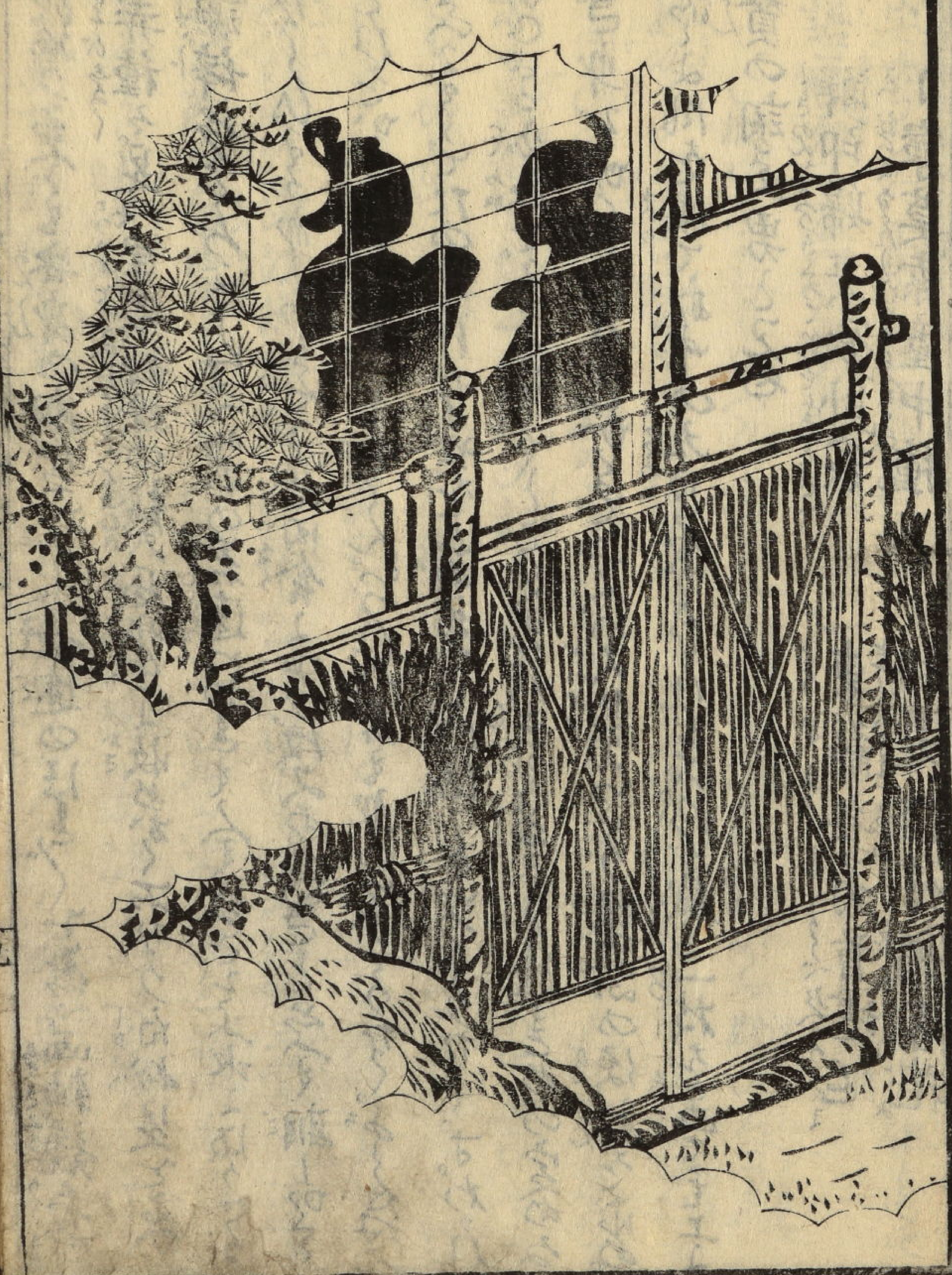
紀岸の要官が寓居よこそ縁をさげて身價のこくはなかる。成變誠あるもの
こなれども小きぬが浮華多さ成りんそんねず。江口の白妙ハ名出し妓女な
るぞんぞ絹百疋よゆるさんや。これら無貴の賊をかくん絡なりと云ひてぞ
當時退じと云て岩人もおめおさせんとて酒ゑみりてゐしてきへしぬぞ
よりおよ計るべき人もなければ江口よくりおれぬ人の家よきさがゆりてよ
六日よてる白妙はおしとさぐりゆて日数の内くるしかくず来りまへて恥を忍
らじさとる此人してせちに延へ免ざべき由へつとと問ふがきる眼睫に涙を
たゝへて世の人の苦情ハまた免じ切れ妙云ざつ仿ゑべしかろさてしかる令
共ま其なるを計るなしと。刀自は事実を調さりと披露して。二人酒
うちのみて小きぬを慰め。故実よおしの免どべきることや。或ハ是をよりて別
まの時至ると云ひて人もそくしく求めないざるかふをぬ涙を落し。
山崎の築紫の津よ家ありぬとあれども。有にかひかれ棹子ありまれ七

まされてハ成仏しかく一人ところそさのをにたるにかくらんでしとかくる。さ
おいてまびしがさて那ぬ暁天よいたりて白妙小右衛門をゆりさ起し。
我既に鋪ところの袍を取て地にあくへて此裳の内に家両の砂金を一つ
にみかくれば是ハつね年月集る所。殿持去て備に当るは宿の用に
あるらん。其餘ハ随分岸殿にあめ数に充て治りの日をあやはらず
まり玉へ。小右衛門成て袍をほどみ彩に行。成變に對してひやうとかくり
袍を解るれバ紫あらちれかくせる砂金幾ばく計ふにて六十足の当あり。
成變ハ是花柳に遊ぶの趣をぬて早く身を接とんて嫖錘の聖
言なり。然れども好色の腸ハ別めて俊傑も覆をあさりぶ。幸に此姪
実情あり。足下とあざむくものならず。我一臂の力を助りんとごく
して百足の價を与じあるハ砂金ハ雜事の費用あらんと正へまのてよ
色し吾足下の情弱なるハ厭しくいへども。実に是白妙が情の憐む

べきが為なり。小右衛門成變に謝して江口にかへり。白妙に逢て調ねと
て如何にて先日一銭も調ざりし。今日如何ぞ全き数そのひたる。小右衛門
成變が言葉のおもむきをかたる。白妙人倫の手を合せて云。我二人の難を遁し
むるハ岸君の力なりと深く其志を感じ。其日なをり数の九日な
まではゆるく妙が房に宿を好ゑ。此身價百斤万事たるやいなや即時
に殿に従てこれ去べし。出舟のそなへをなし。彼砂金を菊庭に換て
絹纊と衣服などの世帯の品すこし調へ。かくて密かに夜よ明翔くる時
暁ておのれがゐる所に起て朝まひまる所へが自身そ。今日限の十日なり
給せし事ふんで小右衛門ほどき去りと纏百足の当に花紋銀二十枚
即ちこれあると求めたが。白小右衛門が銀あるは我こそ今さら悔わる
氣色なり。時に白妙云。我此家に來て十年生活にようて彼是の紺袋
子よのほか。今日我身の泥舟をれる状ひ手べきなるに。鞍口数ときわめ

て今其叔のごとし。臣公かく信を失ひ彼の銀おもてすらで金戈も目前に於て入りて、人を賊と二つながら失ひ玉ひしと、日比に似ぬ怨言をいふて刀自来り胸詞なかりしが。ようしく妻もそれおかれつゝ。けきみ去なりしゆは平日は衣服調度此房にある物、つとも金ととろことありしにぞ、小吉え居きなく懐といふ。小吉が白妙を房に入れぞと人挿出し、鎖を下す音をき詞あらめまじ。厨後に紛ぬ。此時九月のこと免。白妙起てよう〳〵梳洗せし。垢衣の侍まそあき投なから臣公は背後を見て、来月の揺衣乃ふ人此一郎を賜らば、かに紛の望あらんや。我平生とこれ姉妹あり。しられて妻をくかんと小吉郎と共に其家を出、門下の小雪が家に紛て名残惜まんために来りしと。白妙が寝衣のまゝ髪も梳せぬをみて小雪大に驚き、いかにやといふ。白妙我が刀自の怒にふれて勤仕そむく。やむなく梳洗おはれば小雪小袖を取出し白妙にあたへ二人

をかくり歴が其夜は其所に宿せしむ。妙子も両舎人に見をるとまで里にある程の諸妓悉く来て、各々利栄を競て歌ひ舞ひ各芸を尽し酔をすゝめぬ。妙ごとは風流れ領袖浮良に其人を招まゐりて寿きをなしぬ。小雪ここに二人に云て、進退の心得宜しかるべしや。小吉郎云、老父近日はうはよく、今女妓を娶て帰らば、定めてかならず悦ひをうるなさん。是何人に尚万金の計をなすべし。小雪ここに云。又子は天性豊後節に絶たり。今倉卒に其顔を作しがたし。古は逆きて深く浮語して、彼一人先へ帰りて老に来ぬ宿君の中に於て後ぬべせを迎へ玉へて事あらんと。白妙せて我にようしと云はるゝよくんぞやとろげなり。叔しもこれくしくあるべし。室の本に来て紛ところあくのまらん。かくてる程小夜も明ぬまへ従者揖れあまるべしと發ば小吉郎諸ともに殺に接る。明月雲井其外の妓女も皆叔ぞとけ水に臨んで別をうれば、小雪手にぞ一つの提灯を贈て其二人の



にゐう玉へども安身の朝定がくし。長途の障ぐと思ふ。画軸。競香。
弄種々是此里衆姉妹の翫乃ね此中に收めかく而なり。白ね足を多て
謝辞移んでろうにや使へ。此示の君達へはまにも今は清さを水に流うせる
なうしひつすぐ身いわさそうな田舎にゆけば。又あべきと安身朝しがく。
さりまうでたのりげある世をまあ玉へと。ば添てそつろまろなりず。われ
これをかぐうの名まをもなうん。いづれの君も身のしてるうなくふしく世を捨ん
がゆる出我ども。そ深くところ出ん。去も名あも浮きための定める
き身ぞかくされれとし。かくて二人へ大ねよりてろ藥紫の隠我を求め。
而くよ風を候て我中の九日菊もなけまとば。ぬが戯に一枝を画て是上に
賛の詞え人男とつくる

鮮印帰来欲卧家
東籬無菊首堪爬
丁寧莫索塵中種
恐是路傍媚客花

安かにうた墨のの霜家寄ふて白ら菊とやいちん係自ら嫌して定
語画菊に及ばず我足を添んとて
我の上よりうまいろ人のつひにうろ筆は露おく妙の白菊
妙吟じて筆の露つふ殊しくやどぐさん御都製わるろと多く日数経
て周防の室積に至り我をおり。此地にて古里の便宜なれと風流ある
示に寓居を定て舩崎の親しき方によひそくれ、ほけおりて親の遺
をまうがひけせ晴るる日は程近きに遊行し。雨の日へこもりかんで源の
こころあぐれすこしへ我家のころち志けりぐ。ちは人あり。江口の西なる
柴江浦に柴江酒部輔原繩とて由緒ある浪人有の生業にしは堂
積に数日客寓しけるが。人家の内より白妙ち男は其まま那回をる
てぞえうり舊縹の因ありて。里にある所へ路の析ろうを析べくおいじで今人
に具せられは田舎にあろしとて彼にかろうしくきなく跡をうへ

ともさみすれ其所ほとるべくもあらね紫江いろましも白妙にたよろ身の上をも安ほりく朝夕に身銭にけて其日を送りするに白妙が寓より出るろ人ありそあれ紫江是を呼とめそよしさきてわりと我知りたる人家にいさるひあまとなろまほの人は足下の為ふいかある人ぞ彼者を小じんが従見に侍るたあらは用心のあるしかり彼者き人あやほてる人とないへ移ても此浜海賊のかくれ穢とむ多きにそ我も公の命を受ひそくれは爰にありて海賊をさぐり捕るんがあるなりおよえ人甚ふしく住るいずばやうたら疑るん笑止されよなりとにきしくれべ此男は隣国の田舎人にそ頭を叩て恐び懇志を賜て恩徳が謝しまうん彼ゐるまのは豊前にそ郡領が一子にが石具せる賣女それ決絶るさは我督友を連續させなんと國なる親へ一生對面せるべく勘当せられ小人も當津に参着し同者数日に及べ膳にて細に生ねかへ家納

とろへても浮浪るし何とのかはんて女を棄却させ獨身にそ落魄ひさし父れ不興を詫へ赦させたきと涙を落し底を傾て語る紫江彼女にに愛しかぬて親族を思ふを深切なるを見る女の寡ははおのまと身に負て計で我門前の肉も妻を拉せるあお称いうるまじようすがさどゆん我へかばぬてさりりなくぞ露ろろそきまよるげ子為遂なれバ二人に深く悦み悦えども紫江が旅店をもかてろて別まれぬじ人れ和多の為義ろそ安名ら母とされ一族なり紫江が親りしくかくろ女れ授け不斗ぐくあろ安へかるれ一つの力を切そ我も紫江に向そろ一我小あうと我旅亭みいざるひ来りぱふもしそ此事を聞ど玉いどんべ相済の家も血脈を父不孝なれ身一人に帰るべしぬる大人平生厳重なる人にそ某方の我にて鼓負ず嫡家と云さんも愛を絶べき所なかれバ今女をもして不と漂流と云なぞ打斬ても捨べく云さん一属親友

多しといへども當時家勢盛なれば一人として高大人の意に逆へさる
はなし誰か賢兄の為に祖をせんだん詞を出すものありとも若又れい
ろぞへては却て其人も賢兄をそしつて退く事なかるべきあれば家業
を他門の子にゆづりて賢兄一生故口に返去来をかぞへつゝ見る
き旅宿のたくはへもあひ長久の計よらず貯を空くし糧を其につくして
進退つゝまれせんなぶれども時手中の料大半費し給ふといへども猶あらぬ
なれば英へを踵て悔めるさまなりども為さず又只そもし婦人は水性なくも角
もなりぬ况や娼家の女が真に情も一時なり假そめにも一時なり絞高名花妓女
桐識の人天下に戴く或は西國に住る男ありて賢兄を假にちぎり契募
きたり徐人に絹の地歩とせるも知るべくや今まで知るがごとき婦人を人に托く福
にあらせ賢兄が家にかへりしろめて時代輕薄の子弟世人に名を返し
後備を商弄して心の閑をゆるせ言を語り求めて待し搏を撓て

折んとし墻をこえ隙を挨て必事を仕出さん一旦にたまれて家をさきそ
親を離て浮浪不義の人は天地の間に立がたし縋てあひふさがりて后
心に回せれど詞を尽し説き得ず元より家を絶さんや小し理の高強よ
伏し自ら先てひざ我を是ぞ是非不義なるものを捉へ出さんや今見ましと
免るゝ計はいかにもこゝにあるものとこふ計なし女を他に適しめ獨身にして帰らば
また一たんは其の後も父の怒を解きとめおけばあへせしむるとも刀鞘もあぐひけし
女が身も又計ひあたんふたたび命に拾ひ切ける顔色そ女も是非ぞ晒さ
しとも世の成行向ならぬ探し暇に離れて事かたるべくとむべしくも真端を開
きて彼が言を如くさるべしと海山のおもひを胸にたゝへて只あやみも定めぬ
宿にかへりぬ

古今奇談繁野話第五巻上終

古今奇談繁野話第五巻下

江口の下

婕妤が寵は更なり。人を待をみることをる女の身こそはかなしな。増て細き旅の宿に白妙は小太郎が帰りの遅きれば下せん酒を盪て待夫へ屋さへ夜の更るまで其顔色楽ぬを酒をも飲を枕にはく。白妙奈流て何ぞへなやと問へども長き息をはきて語らず只睡入に見ん体を。白妙はねむりせん其動静に心をはけて寝侵だに中夜になりて。今宵和田殿と何とか争ひ玉ひて問へば小太郎袂を擁てきて起。言んとして云ざること幾度洞腮にはるひながら涙を内に飲て胸をさする。白妙いよいよおどろきぶ小太郎を己が膝に抱て言を軟して云。彼袖に別て二度故郷へ久しきれあらねども千辛万苦をなめてしかて火にも水にもならてたちさびなましと心をはく手殿の身の上に悲傷ありていかぞ志らずし

てこさんや。ふたゝび孝をふるひ。立まひてより我を心に卑て今日に
いたるまでの情をうるべきにあらず。我反逆の徒をさふに。叛たるもの
厳威みしておもを容ざ。係を怨してあらば不具ゆるを附たく。我と係と縁
落てまぬの偶も保ちがたく父子の義も絶なそゆべし。今叛ぬるが
我と責るてく理乃答べきなくすなはち剖がれし。白妙女て一桶の名を
取よりそぐがぬくむあらば彼の公いかん。我と係との間に髪を入ざきを
きまゐりれど禍にあるめてよの封べきとをちらず。為らず我が為に一計を
なさで係混に彼じきとなる。白妙こゝん入ぬてもみぬてかり事なら
ば係の添ぬるをしあらんには右の云ふにはあらず。為めて此計をるさん為係の身を
安んずべき縁をおそれ。津國の人係を引をして身のよを不あしめ。其謝礼
として都のとりに持来しる。家传の太刀烈祖勇武の寶鞍。孫にあて
長く還てまるべしと云。我これを持て國にかへり。老父其遺失を

云ぞ不具とゆるすべく中に計ひ㐬しられあれば係も終身よろ不あり。我
も又母に帰をうるし両役の計ひなれども。係は稟賦て君びおてしがさ
てもおりぞ漆さあがく乃て。白妙は懐し小ぞうを合撲て押の乃て冷み然よ
て一若ならざりき彼が其英雄の魂あらんには傳す紅き梯うちてる妖女
よく托べき主を知て。韓鄿王を卒伍の中にえらみむちびし梁夫人へ
なまもく眼慧といふなれど。我輩はよるに不はるべく其堺にあらば。
ただ温柔混沌人をねて終身の偶とし。恩勤を労せば厳宗なるを
懐ぶる婦女の古訓なりねども。近来門阀の浪花を安逸。下米世の放蕩
と帝ふのこと。今や彼れ父子の義全く。妾他姓に嫁して身を托るにあら
ず。思ふに始は情に發て終は礼に止る実に夜役乃嫡なり。深愁は濃より
淡にゆれがたく。人は深より浅にゆれやすし。いざゝらばいさゝよく此そうろ
ひを應承て此役をえたまはるる。但し其太刀鞍をるく彼れにふ

おさなうて後。此身別人の許に行べし。かゝらば其人に欺れてこなたは
ハ今日より君と房をまもらむ。行のに隠んで別を死ぬとせしも
られけげなく其日より独の家に閉こもり人に面せず。白日にも燈を
點じて机によりて法華を繕写して関をまるに女童ハあたか小女のうけぶ
さるより告て悦く事とするを人としいふ程ゆゑて柴江が旅宿に行て
なにとも聞きこえ。寃人の妄言ハあるじとおもへれど。彼方力馬鞍衣服の
類ハ急に落ちるべきやうもなく。柴江ハ中に系て心やすくもあれ人をとぶらひて
早走為ければ。所附に奴僕にゐあたへて津の国へ帰りぬ。其日どろ
の後其物語さぐりありしを見聞ず。夫ゆゑ事りて小右京に至寶ゞ
来せりといふ。小右京宮のかより其物調ふりとおもひて白妙は時をてか
写して譬喩品よりて不覚不知不驚不怖の句にあたりて筆を閣き途
ハ法花を告ひ畢れば法華をもろ。文字の題名八万九字に準へ。昔み

なんぞ全部を写せんと机上に留め置が面のありさまをうかゞひつゝけるに
女ハ筆硯をなげにおもあらてうれ患ども、かくれ小右京ハ面色憔悴ゆく
白妙が出る所へんて卯の言ハなくてかれば我もけ不断一日もひとりあるべん
や。同じ日に浪死を促さんと。躍て走りて死の設けを。柴江も行てそ妻れ變
ざれあれ女を如べ即日死を出んべきなそ。明日いれのまゝも呉不に来あな
まいハ女と死へ送ら私よとて走る白妙其夜をとあそ壁とて身を洗浄して。
今日こそ此一生を托るらんご絶世の夜にあらずと。臙粉香澤をろせ
用て化粧の若ちんて粧ひ。光粧おりとてしし天仙のごく。小右京が座敷
よやとりと寄て小右京に先ぢちて死よてる。柴江が死も其一両まうせて粧を
家と隔てはるだろり。ならず小右京後をて浪よまかり。ならずハ柴江が粧よ
てらふ小右京ハ我死まかりて。白妙に顔を向けて背かゝるなの内へいかるゝ
らんやひきを口を出る付かゝる時の事んとは。奥に縁り情哀へ義折け

ぬすむ
こい
あ

恩絶なれバかりては。終末初にいへるを世の中に多くんあるまじ。なぞ来
りて婦人の艶具を送り玉へそれと信として謝物をいださんといふ。白
妙身邊なる描金提厨を指てすこいが調度は夠なしと僕に命て
隣の船に送りたむ。宗江をすなハち彼右刀鞘家に小右郎が贈る着れ小袖
まで櫃の蓋によそひ盛ておくりけるぞ。小右郎これん我家宝に納まる
なし。やがて女が身ぬれ人の遺書と取替て。かり白妙もつんぞある調度なる
までいる。透ハなどやあるとふ右郎とりんそまバ。彼ハ出いてできくて投げふみ
ゆ。白妙船端に出て宗江が船をよびきぬ。やがて其船へ乗べきが。今まし
くるる箱の中に小右郎殿の護身の香嚢あり。これを戻し参らす間
郵曰くこれをくて宗江をきはよりこゝろんぞ。白妙が艶麗昔に減ぜず尚も
愛敬ぞきこゆるに。なおかりして何かためらはん。従者に命じて箱をおくりやる
白妙繻をとれ出し開けバ内に抽替あり。先第一層を抽出し。内に冊ある

草紙二冊を小右郎に授けて。是ハ去ふし爺よみの白妙が集る。古今新
集家々に八重垣の秘抄すね〳〵に記念とこでめしと今はに磨にするなり。其外
なきハ猶ぞと向へ。白妙かぞへて云。太秦の牛頭香。亞刺敢の龍脳香。奇
南沈水香。数種。九華丹。絳雪丹。紫霊丹。及鬼の霊丹。皆是海上の
仙薬世の珍とする所。今更て益なしと海中にざふと投入らるゝが手も
小右郎もあやしみ惑ぎけるぞ。宗江もえやりて見居ほどなく。白妙第二層を開
出し紅と紫の包袱を開けば。金條環。八宝器。珊瑚の枝を出せる。瑯玕乃
緒絞小琢る。琳瑯琨瑶。火珠。琉璃。回々の自鳴鐘方寸の中に時を報ず
る。地中海の金銭。飛燕小合の中に遊て好奇人。燕窩の安達貝。扶桑の瓔附
子。鄭若猴玉の類其数多し。白妙収て袱紗におしつゝみ。むつくれ是も
海中に投へらる。艶なる女の船端に出てとる事かれば。此岸高き人
多く集まりて惜むべしくとゝも何の由へかくもするとも知ず。白妙下の層

と引出せば内にまた一重の匣あり。其中ハ上等の夜明珠。火齊珠。琳玉。璧玉。通天犀。人魚膽。鳳豚。龍珠。其價定めがたき種々なり。衆人見て皆其珍奇を称讃ば足をも投んとするが押でぞかくも熟と見ぞ終身乃言ひ其設あるで此れ共大に悔みしかども恍惚て白如が果ひが船に向ひて發ろく罵て云賊妾小万郎底し里を出る時ぞ容易の事なるべ人の悪を貪って恩を刻なる仇人なれ死して神あらば必ず其人を放つまじ。その面ざへんども人とも今日其かゝる夜を見て芸も徳かるに善ぶ人をある筐の後の色に。柴江酒郡の浦といふ人あり。主だく不領ともなく何の不德ありて家業へ嵌て人乃田宅重寶なぐ被を綴して利を納めて年々に點し。時々我徒し里へも来り拾ひてありし人へたとへどもやらいぐ人今ぞより來りて海賊の張本なる事終を臣國とし不定めて居に經歷をと宴なりが。定めては此湖泉にやいらんぞ其刀鞘の早くも出るとみてらん

まで若其人なくんば。左ある所に行て下ぞ世の中ときるわへんや。今小万ら底志定らず。情の方よくだけやとく。行を急くても惜りげなきてとうらくてもなほうらめしけれ。里の姉妹の贈物と撚はねどとも。足でそ年来顧の諸君。都鄙の客商の恵と續れる百寶こそ情人と終身まで生活とがしかるね設なれども。今こそめて用ゐる所なるし。我箱の中ふ玉あれども情人の眼中に珠なし。是皆妾が薄命の展ざる所。妾をそぶ媚死で出ては復び舊を送り新を迎るの会なし。左ずしてのよくべ命もたくなんと云ひし初心にかへりて。妾ハ底にこそむかず底てこそ妾にこそむかりう。衆人これある所小万郎盃入りて涙を流し。白如にむかひ過を謝せんとす。白如擬で此時にいたりて一旦彼船へ飛びで免るべきやいで寶匣を抱きて船べたに出。さらバ其船へ来んと涼きされ向て跳へかり。船中忽に救んとする内白波滾々て影もなし。正に是なる

盛粧躍海目無涙　去處侠魂伍緑珠

さくしやくべき。傍人皆手をうちて小太郎を笑ひのゝしる。宋江も海儀とあらそはんも、終に其船を出し、其ありさまで南海に行んとせしかど、風定らず。大海の沖に船ぐりする所に至て海儀宋江を捜り、倉れ密使。國人を殺して船と陸とれ取かこみ。今此女が指行へる艦頭に紅衣かゝりる船こそ召捕て正せんと。宋江そんじ是一人も殘ど郷れて去ぬ。彼小太郎は船中にありて大に恥入て、心地くるしくてんへしがきりて悟りて言。女が深情にそむきしは残念なれども、彼は浮花の身なる人。我も若き手の浮氣放蕩。彼は彼が侠に死し。我はまが環にくへ家ありて惑ふは我ぐらくは今さら遁世せずばなく人に笑はれん。父の不興を佗て家にくらさしと、太刀刀方なる調度を出し時のさまにふりかゞて古にかへりまがなりずも小太郎が為に調度とつら

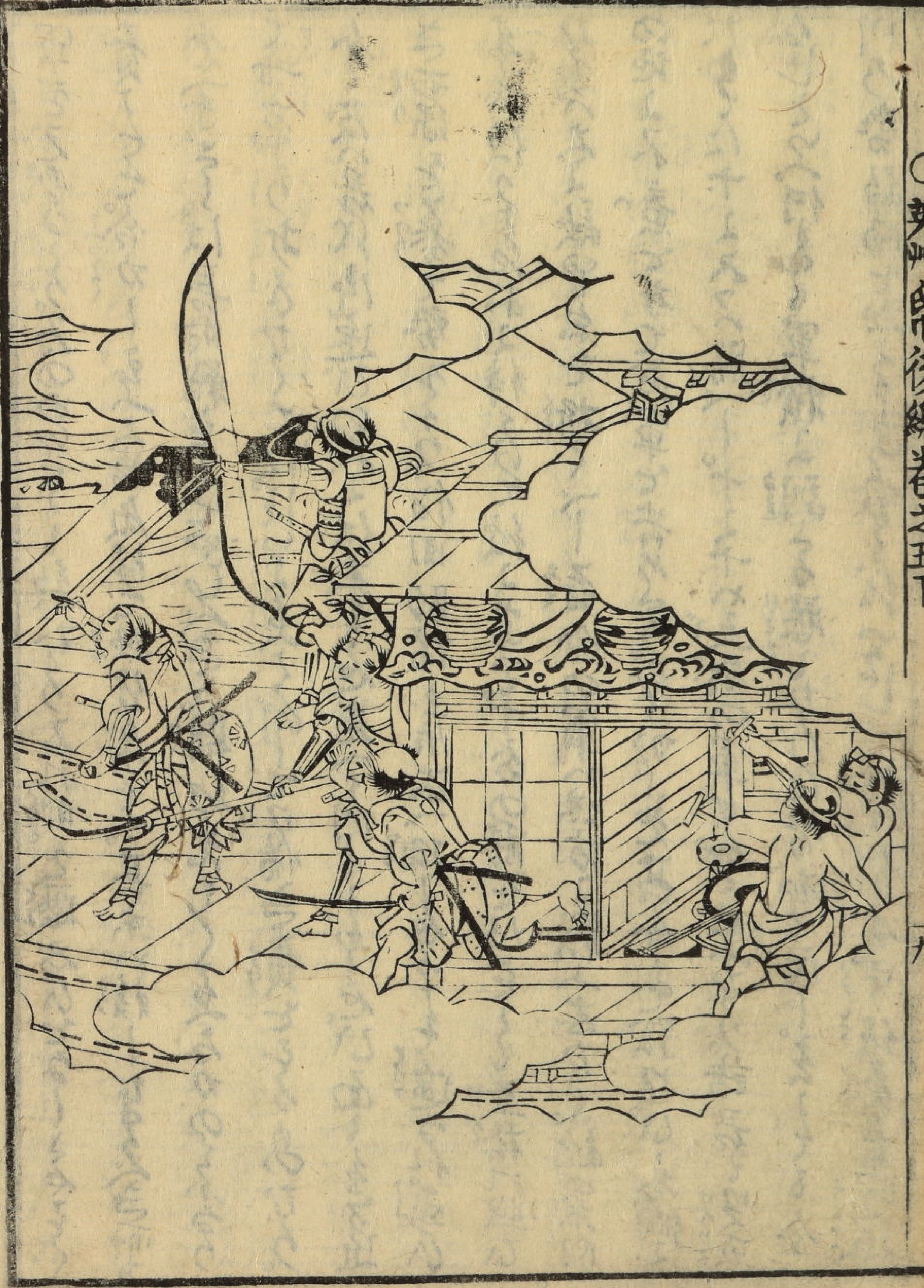
孫又正方も何とやらん此冬は年の衰を覚えて、老の坂には騏驥も躓く。戀の山には孔子倒べし。男ちなきさまぞ。一旦のいろ解家のとろ上国の人にかはりて俗情に疎しぬを悦び、やがて家務をゆづり司法をさしむ。扨岸の熱官成變へ小太郎が其後信じなれとへりとも今は門戒も圍にゆる。朝きたりて大抵は岸に船は掲らるれ、さし深の少力をもて落しうる小抱かなども家の傳来にあげてかさせよと漁人を呼ひ揚せけるに、去に深のかまに一つの箱を取あげ。是倶にはじ底の落せしおかなりしときげるる。成變いるぞと開らきみれば、皆夜光珠の數ありて。一角。魚膽。鳳環。龍珠なんど世に不落無價珍寶なり。彼漁人壊美の酒に酔て。感つくがかれ額ぞれ。其婦女の動作し我は以ての白粉やて小太郎が婚緒を遂ざる宋江が悪心をつくろふむし我小太郎底乃んとくんありす金銀ぞめしめるに、君すくれが志と殊さるて速に其數を

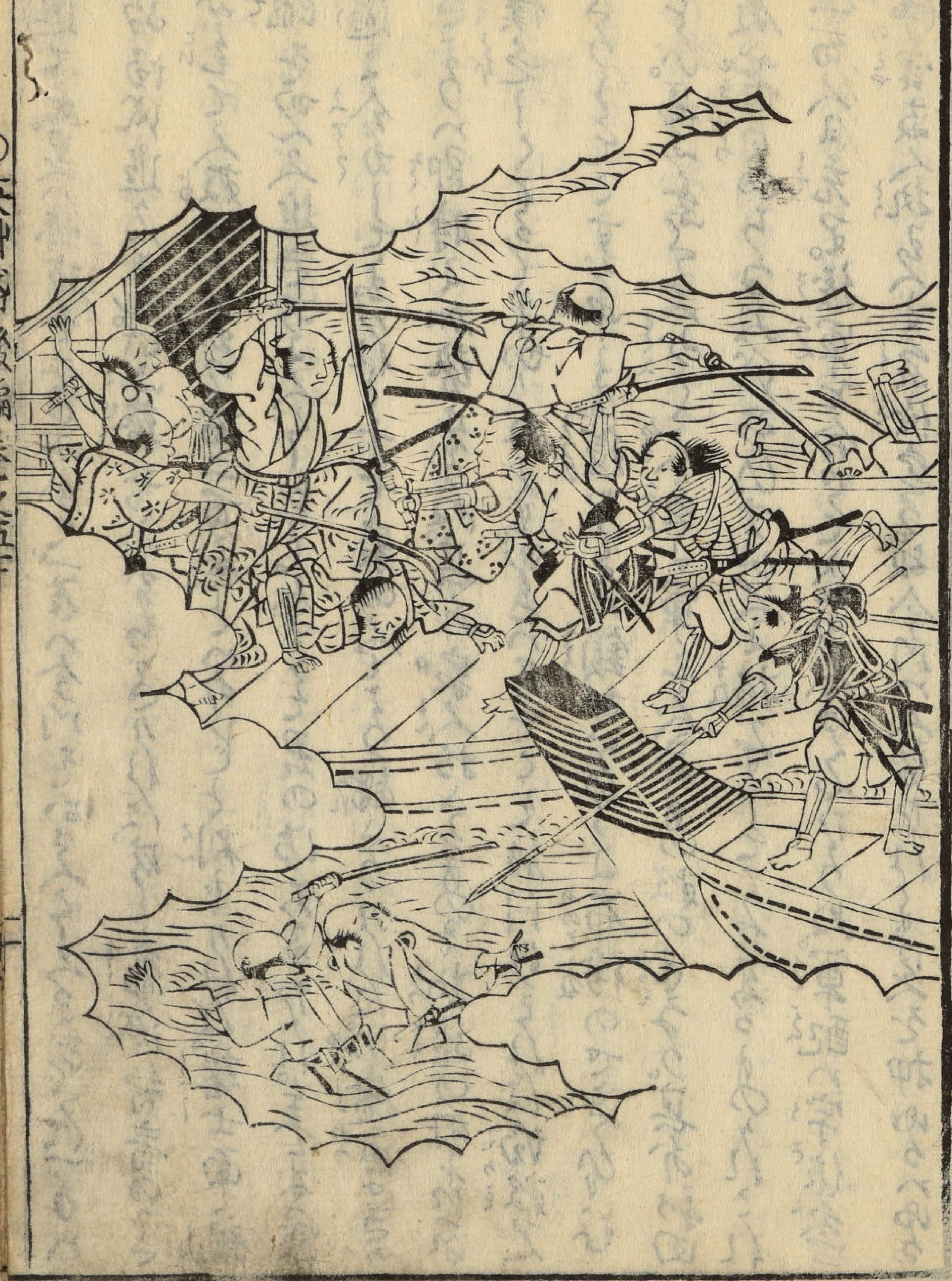
そろへて事成就せしめ給ひし恩を謝せんとす。いま漁人に托して百寳と
銭を贈、美意に酬ゆといへども、翁は詞つゞまず、女の指使なく、他事をとらん酔言
しける。成彼白娘が霊なることを知て、寳貨をうけずして、水陸を設け、供養
して幽魂を慰しける。痴なるものなれば情にあらず、死ざれば徳にあらざるは尤常
を論ぜるのことば。婦人が身によく當まりて、世の風月に老て、すなはち一篇を
看破て、情のある所、真のありかを知るべし。人の笑ひを慕ね戒ともなるべし

⑨ 宇佐美宇津宮拙杖を飾て敵を詐詰

南朝中務親王の御子兵部卿尹良親王は遠州にて御誕生あり。後
吉野へ参りたまひて元中三年大将軍を賜て、應永四年新田原田桃井
其外の宮方相議して上野國に迎へ奉り、岡本山河十一家の人々供奉し
駿河國富士が谷田貫次郎が館に入せられ、よりて宇津の親王と呼奉る。
此田貫が女子は新田義助の妻室なりしかば、其好ありて宇津と富士十二
郷の諸士服屋殿の舊好となりて味方にまゐり守護し奉る。同じく甲州
武田右馬助館に入らせたまひ、それより上州寺尾の城に移りたまへ。其間合戦
度々なれども、同三十年寺尾にて御子良王を殘し逝。御身は信濃國宇
津野六郎が城にうつり、其翌年参河國足助に移らせたまふ。途中浪合の
大河原にて飯田太郎、駒場次郎三百余騎にて待請たるに出あひ
奉る。宮方命をかぎりて戦ひ、飯田駒場を打とりけれども、味方にも奥田羽川熊
谷を始め六十余人討死して士卒も散々になりければ、宮のがれがたし
とて在家へ入らせたまひ、火を放て御生害あり。其後は良王も寺尾
に座堅まりて、桃井が落合の城に移りたまへ。其折節尾州津島の
橋何某は尹良王の姻属なれば、此方へ入らせたまへと申こしけるに、
して其の便宜を失しみ、甲斐信濃を歴たまふ。不意に吉家に討れし飯田
が一族、これを討んとする駒場三郎、供養の軍せんと多勢をそろへて襲

は桃井貞綱ふせぎとゞまり討死しける。良王其ひまに落のびたまひ
笛吹峠をこさせ玉へばあとより敗卒等追々きたり又追々加勢と
して来る人数あつて二百斗になりぬ。かゝる所へ津島大橋氏より注進
として常川信矩二百の人数にて来り合せければ。味方も生出る
心地とぞ見えて駒場飯田も上杉今川に告て加勢をこひ。重て
信をまち軍を円てためらひける。上杉今川も寄きたるべき風聞ありて。宇
方は早く間道より津島に立籠んとて人のすゝめしに。宇津宮貞綱
衆人にむかひていふやう。ねがはもつておつづきそ身さのためによれるは必来で。
先公の御鎮以来楠と執し原田桃井忠死あり。新田義則入道
紀場志れ玉ひ味方の大事は時に迫りあり。去るに是も元合戦
のゆゑとられ。かれ間は些のがれんとのみ心へて。敵をおそるべき理を
なさず残念のことにあらずなり。今日此所を遁ても津島にゆけば
軍をえあるべからず。そのあひだにも敵にかこまれ卿を擒となしなばいよいよ
責よせて合力し玉ふ大将あらば抜付るのこと。甚未は接しなさるべき所も
見へず。さらば甚府戦どしをやしふべきか。断絶光もなく丈夫の力のかふれり
て此方よりおそくなくてはいづくへか行て備を負をとるものなり。
今は我等御退ひの人に依奉りき先へ入りしらせし面々も多く道
き不縁を募て勢をそろへ。飯田駒場が居所へ攻よせるも遠からず。敵は
来るべく待うけて彼に当るも十分の勝をうるとも互格の戦ひ
なるべき所に敵の気を挫くべし。互合の軍は味方に戦ふ志なく。敵は案内
の地に不意をおそて我軍を苦むるか。かゝる処に其心して戦はゞ貞綱に
たとへ十に五つは勝べし。十に十は互格の軍せんと云なり。諸君も賢慮
然れども何をもつて軍機に列なる歴々なれば皆承て同じ。去りながら今
川の勢弱き場を助るとてなる戦はいなじして防がんと云。宇佐美左衛門尉





進で云。是ハ味方を二手に分て一手ハ今川をおさへさせ一手ハ
弱将ハ進んさんば小勢二つに分ちぐさりければ。時に斎識智音のさ
なくて人数をとりなで百二百居てハあしじと判じければ。諸士面々親
疏をかんがへ進きなまんとらて。今こそ君の待たるなれ。是ぞ本懐
過に合力してまゐれと十七家の人々より觸されければ。由備厚きう
さよりハ即時に加勢なりぬ。其外家人およそあまた與力の者の家
僕急しくなしくしかくねども。かねてハちとして練行けれは物数人
うちとてすが中にも。鎧なきハ鎖かたびらに布襷のせまきひもむ
すび。馬に乗るハかく人数に軍をなすべきあの数のすすみ。長井新田
原背日のちかみをみて召ひ。吾が人に招ざずして是をあつめこれ
二百人に充て。残軍と合せて五百人となりぬ。軍配ハ宇佐美
津宮あ人執主人となれ依宮司。故今川ハ大勢なれども是を押ゆるハゆる

やかなり。弱将へ小勢なれども大事の軍なり。吾軍師ハ只其むかしき
かくれ我うけまはりんとてげまうてにようて。吾ね國をとりうるべ。宇須
美のうきんべきに極りて二百と撰み。桃井利貞など勢に従ふて又。
に對陣敵の気に奪ぐらかれバ。兎角に人を換せぬ工夫あらまし
とて。吾おも其旨にとて。宇佐美定満即日出馬に臨き宇津宮にむかひ
ひて戯に細て事たちば勝利のもとなり。今度の軍の秘密とする所互に
書て之へて。吾綱も老紙に書付まいて定満も老紙に出し
一字を見りて見るし一同に用ききれべ。吾綱へ勢の字を書き定満
へ天の字あり。吾綱云。是軍機の秘なれバ六耳に傳へうら。下に一字を
添て向なるべし。宇佐美定とて。吾綱が勢字の下に張の字を書添
てうぐしりれバ。吾綱へ定満が天の字の下へ佐の字を添て之へしぬ。吾ね我ぞとん
合せ之ふもと點頭る上の礼なしても立りり。かくて今川兵五助ハ弱将が後

結せんとて。小塩尻を越此所にあつまりて。東の山きはに援軍とし
て其勢は林をめぐりて多おく取かゝりしとて。今川勢てそれてその宮
ぐさの宇佐美なり。百騎ばかり足はやく。林よりて陣の后ろにとする
ゆゑ可笑しれ。他らに押へられて。此みならず矢におよばん。一時にお
はやして通れやと。又百余騎を引出して敵近くよせて吶喊で戦をいどく
これも宇佐美は戦んともせず。一騎ものこらず後の山ふもとのおりにえよ
て要用えたくしたる陣所なれば。備を密かにたてゝ身して待てよれ所
小射手を出し素引しておびやを放さば。大ね山のふもと所にありて敵味
ゐるをえらん。小旗を動かし指揮をと。石は大木を切て塞として。山に向
かへ石弓将をさん結構なれば。今川方陣脚をあらかじけて。ひれ伏す敵
ちかくよせてを射させれども巌石に楯をかさね乃て車とも出せ。迎よ
か若とえては楯の影より矢比よ射てかけまずぞ兵卒をおひてよりの

つゞけ。宇佐美は後より吹颪山おろし味方のためのさゝゆゑを見て。時なれば風上
背て陣を取べし。石壁の下は風をよぎてくらく。まへと云なぐさめ為ふ
いゝる程つよく風がけしきをえて。これより味方は風かみに陣せするされ
べ。兵粮を下知して敵ちかくまで焼まり。稲の世家々に火をさし入り。
たちまち火さかんにひろごり敵の陣所に焼うつれば。宇佐美下知して楯を
たて崖をとらへて喊をどつと上ければ。今川方火に氣後れして
あけども。大ね物具てかも支ず。敵は焼おふせんと議ども。逃んとせば
け陣を忽ち破べし。出て敵とむかへ合戦せで衆をたのみて後し先にすゝんで
炭となれるを火とむかへて敵にむかふ。嘲の声しへしどろうえ
敵をさへも。還むらむに敵の乱なる把火のひかりあり。拙を敵へとれ
塩まりて門ぞ追手によする。大本を門の内に踏入やる人数を今川とぞ
めて。かの険地にて敵のうらねば逆活よけ方よりかゝるべからず。進で周ん

して進むべしと一町ばかり行所に。吹来る風諸勢の眼にいりて痛ければ
しばらく眼を開きがたし。面々手を執まねて痛を忍て退ぬる所に宇佐
美が勢東方より出て究竟の若武者切来るを揃へて切てかゝる。睛
号を定て働けども。今川勢はかゝずひきなびき。敵は風揚毒の
計を用ひしが。一先門中に大将先に立て門の将に士卒踏とゞまりけるを
く。散々に仕つけられければあのも遁れぬ宇佐美思てかゝるき不
てかしこに後在る柴を焼あげられど。白昼のごとく陰なをてらし。
士卒を指揮して斬て落しける敵どもとゞまりて陰をきら
せける。敵六十余人を打取て。作や一石にあまり相撒番撒よりは償
とおめて変ぐりとども大に笑して凱陣しけるて。宇佐美宮石綱は。
良王を大門山の南の間なり漢谷にをかゝる。今川は心安しと。二百
人を二手に分ち。一枚は桃井右馬亮七十騎を先手に付宇佐美が陣を助

よりして西山に行明神の森に伏し居る。石綱百三十騎をもつてかへ
てつ配言合よろしくなりし敵間近く入て間合を押行けり。須田が勢弐百
人斗甲冑をよろひ此所に士卒をやとめて敵の様をさぐりしに宮方き
のへ及びしを今川がさへのたまはりて。老人にてぞ負るは此手にある
てる。勢を引るひかしての勝負をあそいろんとて身の進退を定んとす
其人数いまは百余になじとぞ告けり。あるむざんや。今川の大勢に
二百余の人行くれて一ツ時も合さるべきならめどかゝへ一て生どり
になるべしとぞふ其所に伏兵ぜんとする所。ようなりぞろとおめいて百
余の兵押入る。須田勢より寄せては心もおらず持は取られず。所
は足軽にかゝず二町斗退き山の尾を後にあてて備を定めんとする所
の森より桃井が伏兵起り。民家の人乃妻を宿いておひたゝしく喊をあ
げける。敵いかゞ大勢なるべしと仕方ひかげず。須田が人数も乱れて行て

義綱桃井備を合せて押行程に。日ハ暮たり。勝畑ハ大辻の小堂を楯にとり
て陣し在家をこぼち篝に焼てゆだんせず。義綱桃井ハ対陣となりてあれ
其夜いまだ明ざるに宇佐美が勝をはかる一軍ず本陣の跡ハなくなし
たるかれ者ハ後陣に一隊をくはせてゆるゆると押よせ一騎馬八十騎を率て
たりぬ先ほけ。醜子れにきそ来て敵の後をふさぎんとぞかかりける勝畑が
勢は是今川敗軍の告に安て力を落し敵のつねにハとても引て行細之
の士久りて向後の切あつのある哉。此路の平地に伏勢あるとやれ然なる
敵の挟ぬ内に力をつくして斬脱よばけ候はんとぞ却て一人も免まはじ
ききでも士卒をはげまし周なして行あに。大木の下より出るハ宇佐美が
勢数千を挙て。今膽を寒くして居るハ勝畑が一軍なり。兎群兎に異ならんと
して市に虎れバ搏を魚群魚に異ならんとして岸に上れば数あり。身の命を
しらぬ者どもの逃足にて走りければ官軍の勇士達の逐つて結ぶとも

六十騎の健卒さへと飛出れば。駒場逃耳に安せて登をせんとの塞がれ
を辛まとゐづまゐて逃て行。先軍ハ撤勢でありて敵を追す。勢軍を
一所に合て行べきなれどかれバ是を仕方なく退て行程に。敵ハ居所まで
迫られもらぞふるくてありね。今を残気くてはとふのあり。それへはやく参
小路へ引入りたる義綱今ハもう勢を張あはせるとなるべし宇佐美ハ我も又の
便をよりて味方換せんと大勝とはかると互に手を伸てもやう然びが勢気
れなひ々にはげみ際の軍は合力をもて仕あはせるとぞ詞を厚くして又を
謝しが勢の武士みな人つくしきりぬ。勝畑の余勢進国に命ひて
後の乃今と出すものなく。気勢つき疲しく陣営ふるありれバ宗は従
来てこなしず。大将の人も其武名を感じられまりて近国味
方なるもの多く宇佐美宇津宮士卒の調練れてはるバ。常に門
とまそう遠がけして騎がりるとて出働くと毎度なり。勝畑が一軍ハ

かくてはやての出陣ハ士卒ハ宵よりしたくさぞ騒擾なくこゝろへてゐると
出しかバより城攻にかゝる表裡多かれバ早晩滿國に發行し然さ
しや弟もんと其備をなし。上杉今川も皆かゝりて用心しけるとかん。
初ハよせんくとせし敵さ却て宮方を心ぼそくひろけるが萬の勢の形ち
皆かくるてぞかし十七家の英雄心を一つにして守護しけれバ京の人安
静なりけれバ。當那天皇の社内に尹良王の靈を若宮にいはひまつり。
始て祭礼を執行ふ十一家にてより船十一艘を出し。家の紋の幕を張
らせ櫓の灯挑に姓氏官名を書しるし。船中に笛つゞみをはやしたる
らして戯楽をなし。民家漢人までも船をかざりてめぐりける程に此湊の
繁昌四方にかくれなし。宇佐美宇津宮ハかゝるおりとても城中を守り油断
せず。胴丸城をめぐり給を彼より人の氣色にも心付けて毎日心腹の
家人をえらびて内郭外郭要害ある所ハ人のようち出べきところにあづけ

なすに篝寝をたけ。武者ハ砂をならしてそのさまハさぞかく用心を
ありけれ或胡とゆの方ゟく險き所ハ溝ゟて引せしる柵の際人のとをり
あるかとあやしみ思ひて心を付かるふ。よ日十日の間花どこせるこ篝
同ふ足卯あらされバ城中に敵のおそてもまとつかれるのものわざふやくと
案ぜられ。それからの敵となるべきへ。早尾の妻が謀り祖へ佐屋の墓覗へ
忍んでそれらが窺ふてへる竊候ならんと心付く一日諸家と集て評
議して云　當一足條何某佐屋と早尾と同日に責べきまでかひなき事を
所より加勢をえても必ず防ひえまるやうなくしてしかも味方は敗
北の手つひをる所なれバ其條にハ心覚ひあるべくしてぞくへ侍るやう
かく攻寄ハおよぶハ今日明日の間にあるべし。總若備我方に油断なき
ての方へハ夕けるもしかうぐさし。士卒の面々其心得あるべしと内々に
觸られ初の日越かれるものあ人をふちて早尾と佐屋へ歩調に差し

るが早尾に登りぬるは頭へてうちぬ佐屋へ先にしるしぬをしてくるか今日
彼所に張く入りして他所人を入ず用心の躰なりとりきかれて此城へ
佐屋より忍びを入るとさとり守佐良が津宮内侍して却て敵
のうらをかく手段を計りけるに其故佐屋に甚尾大角。大将千幹進と
いふ勇人あり津侍ともなへんとひよる多勢あり　速此宮様らせまひて
勢さかんなる中へ手を出し来てあるれ。諸将飯田乃家より力を添んと
あるに思ひきらず口出して無用の沙汰に至て甚動静を窺ひけるが此の手続き
の余故に諸士の私に起るに付其不意におくべしと立みちて入る。既に水無月
の祭日にいさりて今は年へ去年にまさる花美をほどこし十一艘船をならべて
酒のり。大吹大挨をそゝがせ其ぶ漁人らも船よろうみて上と楽く然りし
くに城へ大将中務の大輔年々の行船を城内にむ入るべしとて前日より
内堀所くに材をけしてひろくかまへて掃ひ清め。さぞ不調月も晩に向ひて

門の両脇ひあつ居時大将千幹ゟ五六十騎百姓の体にて人こみ足を付る
待ちてありける程に依おれて我は城をめぐり起こしたりけるに日は内外の郭面
門も大に開き。女房童まで夜きそて如しても構ぞ遊まで除き大樹の
下にまちあそぶに幹進物を見て堤乃ぶけふ味方を待あませ。所にあるに
つまやまと卿手の門に入て。先甚急に火をさし城を焼る。早くも彼を
ひる夜より火消の者出きたり水をそゝぎて火をお消し。門をひしと
閉て。船にありとみえし守津宮守佐良方より打て出。大勢をそれの
ことみすは斬とし多く卿とる。大将はうち死を落る手のもちるして敵
の柄を引向ひてそを奪て即時に敵を偽引計策をなし城中
に柴を焼あげたり。甚尾は六艘に人数を遣し所々に分ち杯に祭り
大将の体をも日の暮を待居たるが合図の煙をみて我船に號乃燈籠
をあらく挙て。味方の船に調しあるを城の進をと目あてに漕寄勇只今

隆りけるが那艘の船ハ先船にて大将に告しかバ。宇佐美宇津
宮も勢を率して二艘の快船に合図の笛鞁早拍子をうたせて艘船
ある船と同あそび見バ十一家の船灯燈と見やうせ早拍子と合せて驚
集りぶ元より肌具足堅固にかためて臺尻が船と其中にれこみて大ね
士卒ぶちらみく悉く海に切沈め。其時土艘同音に臺尻うくさみさ
いみところやしけり。臺尻が残党の兵船後よりとむむ。本船の大変
ありとみてたゞちに招あひ。今ハ是まで成る面目なしと。家の子ら悉を
一緒して三百余人岸にあがり切てゆる。城ごとまで立ごとふせげども夜
軍になりて敵はたくみなれバひききるびくとも其団になりて城に於て入
爰我内通ありて二の郭へ士卒を引ゐんとあるそさすがど付入りてやせん
と進む三百余人気ち終りけるを論まで深き泥の内にたぐまへ不ひと。
大将中務兵卒を下知して続ギに引あげ。卿ともすでハ泥の内に自

殺して失りるぞあらしける。彼網宇佐美は機をさぐらず船を寄せて
臺尻が居城に逼て。諸大将後詰して一時に攻あせ早く土地の仕置
と出し捷を津浦に献じけり。弱将が助勢もかゝき場を引とりて逃れ
くりぬより耳びすれ出さバ。宮の御座所へ手内に奥旺し。重朝の
余音はけ永に響て。臺尻うちとりしかバ柏子歌乃名とるなりし
も。久しき世乃調なりけん

古今奇談繁野話　第五之下巻　大尾

古今奇談 英草紙前編

全部五冊 先達而出来

明和三丙戌年正月

江戸 通本町三丁目 西村源六

心斎橋筋順慶町 柏原清右衛門

大坂 南新町壹丁目 菊屋惣兵衛